

## 要旨

日本の園芸文化においては、花のみならず様々な植物が鑑賞の対象となってきた。日本の園芸文化は江戸時代に大きく発展し、数々の園芸品種が生み出された。江戸時代の園芸では時期により流行の植物が変遷し、楓は元禄頃から享保頃にかけて流行をみせた。楓の流行以前は、椿や菊、躑躅等が流行しており、いずれも花の鑑賞を目的としていた。楓は紅葉をはじめ葉の色や、葉の形を鑑賞の対象としており、日本の園芸の特色である「葉芸」の鑑賞において先駆的な植物といえるが、朝顔や菊などに比べ楓の研究は進んでいない。

江戸時代の園芸では、品種名に趣向を凝らした園芸品種が多くみられる。和歌や人名を引用した命名や、花や葉等を他のものに見立てた命名がしばしばなされており、園芸の楽しみの一つであったとされる。本研究は『歌仙楓集』、『新歌仙楓集』、『追加楓集』を題材として、楓の園芸品種の命名を検討することで、当時の楓の第一人者であり、流行の契機をつくった伊藤伊兵衛政武が、如何に楓を捉え、命名していたかを明らかにすることを目的とする。園芸品種の品種名や命名はしばしば着目されてきたが、これまで体系的な研究は見られなかった。本研究は、研究が進んでこなかった楓と命名の研究の両面に寄与すると考える。

本研究で対象とした資料は伊藤伊兵衛政武が著した楓の図譜『歌仙楓集』、『新歌仙楓集』、『追加楓集』である。政武は、父とされる伊藤伊兵衛三之丞と共に、近世中期の江戸の園芸を代表する存在であり、多くの業績を後世に遺した植木屋として高い評価を受けている。そして、元禄頃から起こる楓の流行は、政武の活躍によるものが大きいとされている。

第1章では、伊藤伊兵衛政武及び『歌仙楓集』、『新歌仙楓集』、『追加楓集』の位置づけを行うことを目的として、江戸時代の江戸における園芸の状況をまとめた。

第2章では『歌仙楓集』、『新歌仙楓集』、『追加楓集』に掲載されている計100品種の楓について、掲載されている品種名・説明文・和歌の内容から、それぞれの種名の由来を検討した。検討の結果、品種名の由来は葉の美しさや特徴を形容・比喩したもの、地名や場所を表す表現にちなんだもの、情景を連想させる表現を用いたもの、品種の生育上の特徴や作出のエピソードによるものの、4つの類型がみられた。各類型で検討を行った結果、楓の品種名には「錦」が紅葉の比喩として多用されていることをはじめ、古典的表現の影響が色濃くみられることが明らかとなった。秋の紅葉以外にも、春の出葉や多様な葉色、斑入り葉、葉形の特徴などに着目して命名を行っており、さらに、川・時雨・露・風・月など、和歌で紅葉と結び付けられる要素が品種名に取り入れられ、植物の特徴以外からも楓を想起させる命名が行われていたことも明らかとなった。楓の品種名には採取地や紅葉の名所など地名に由来するものも多くみられ、それらの多くは和歌の歌枕であった。政武は品種名に和歌的表現を加えて風流さを演出しており、彼の文化的素養が命名に強く反映されていたと考えられ、同時に上流階級向けの宣伝的な要素が反映されていたと考えられる。

本研究では、品種名の由来について不明確なものが複数みられた。また、本研究は伊藤伊兵衛政武による楓の命名のみを対象としており、他の植物や他の人物による命名の考察には至らなかった。楓を取り巻く園芸文化についても、依然として不明な点が多い。本研究で達成できなかったこれらの点を今後の課題として提示した